

## 正誤表

お手元の「日本母乳哺育学会雑誌2011 Vol.5 Suppl (学術集会抄録集)」に、  
記載ミスがございました。

不手際を深くお詫び申し上げますとともに、以下のとおり訂正させていただきます。

○10ページ 一般演題(口演) 第2群 新生児支援

誤 2 高年齢(kangaroo mother care: カンガルーケア)中の・・・

正 2 KMC (kangaroo mother care: カンガルーケア)中の・・・

○15ページ

誤 テーマ「WHOコード～母乳代用品のマーケティングの国際基準～を学ぶ」

正 テーマ「WHOコード～母乳代用品のマーケティングの国際規準～を学ぶ」

このほか、69ページの一般演題抄録本文が、68ページの抄録本文と同じ内容になっており、次のページのとおり「差し替えページ」を配布いたしました。

第26回日本母乳哺育学会・学術集会事務局

## 1-5) 授乳期にある母親の食生活に及ぼす哺乳行為と意識の関連

秋山(山王丸) 靖子<sup>1)</sup> Yasuko Akiyama(Sannomaru), 深谷 睦<sup>1)</sup> Mutsumi Fukaya,  
小林 晴香<sup>2)</sup> Haruka Kobayashi, 真木 めい子<sup>3)</sup> Meiko Maki, 武市 洋美<sup>4)</sup> Hiromi Takeichi,  
氷見 知子<sup>4)</sup> Tomoko Himi, 西明 眞理<sup>5)</sup> Mari Saimei, 小林 美智子<sup>6)</sup> Michiko Kobayashi

【はじめに】母乳哺育は人生における食生活の開始点である。母乳栄養で育った子どもは、離乳後に野菜・果物の摂取を好むことが明らかにされている。また前回、我々は、母乳栄養で育てている母親は自身の食生活に配慮している状況を報告した。このように、乳児期の栄養方法と母子の食生活は関連が深い。本研究では、前回検討しなかった哺乳行為と意識が母親の食生活に及ぼす影響について、明らかにすることを目的とした。

【方法】単胎で初産の母乳あるいは混合栄養の母親を対象とした。平成 17 年 12 月～平成 18 年 4 月に、東京都内の K 区 N 保健相談所 (N 相談所) の乳児 4 ヶ月健診に来所した 68 人 (生後 3~4 ヶ月) および O 母乳育児相談室 (O 相談室) に来室した 69 人 (生後 1~6 ヶ月) から協力を得た。対象者について、O 相談室の母親を母乳栄養を強く希望する者として考察した。調査内容は、母子の属性、食生活に関する疑問や不安の状況、授乳の状況、母親の食生活状況、食物・食事摂取頻度状況である。

【結果および考察】対象者の平均年齢は、N 相談所 31.4 歳、O 相談室 33.8 歳であった。栄養方法は母乳栄養が N 相談所 58.8%、O 相談室 58.0%、混合栄養が N 相談所 41.2%、O 相談室 42.0%であった。栄養方法と調査地の 2 項目を説明変数として、食生活状況、食物・食事摂取頻度状況を従属変数とした重回帰分析を行った。解析の結果、食生活状況では「現在の食事に満足している」のみ、調査地の影響が認められ、O 相談室の母親が N 相談所よりも満足していなかった。食物・食事摂取頻度状況ではモデル適合度が 0.1 以下となった 8 項目のうち、海藻類を除いたカフェイン飲料、牛乳・乳飲料、洋菓子類、夜食、外食の順で、O 相談室の対象者の摂取頻度は明らかに少なく、いも・加工品、生果物では逆の結果を示した。すべての項目において栄養方法の影響は認められなかった。これらの結果から、母乳哺育に対する強い希望は、食生活に影響することが示唆された。

1) 城西大学 薬学部医療栄養学科

2) 城西大学大学院 薬学研究科

3) まどれ助産院

4) 桶谷式乳房管理法研修センター

5) 長崎県立大学 看護栄養学部栄養健康学科

6) 活水女子大学 看護学部看護学科